

誰もがどこかでマイノリティ：複数のアイデンティティを求めて：書評 李建志著『日韓ナショナリズムの解体―「複数のアイデンティティ」を生きる思想』筑摩書房

小川, 玲子
九州大学アジア総合政策センター

<https://doi.org/10.15017/2186185>

出版情報：韓国研究センター年報. 9, pp.57-60, 2009-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



誰もがどこかでマイノリティ ～複数のアイデンティティを求めて

書評 李建志著『日韓ナショナリズムの解体—「複数のアイデンティティ」を生きる思想』筑摩書房

小川玲子（九州大学アジア総合政策センター）



ナショナリズムという概念は近代国民国家形成と共に普及していった極めて新しい概念である。しかし、国民国家が成立すると、出身地や、地域コミュニティ、家族や友人との日常の関係性の中での自己の位置づけよりも、単一のナショナル・アイデンティティを称揚する「国民化」の力学が働く。B. アンダーソンはナショナリズムの象徴として国家のために犠牲となった無名戦士の墓をあげ、「アムネスティインターナショナルのために死ぬ」という人間はいないのに対し、国家のために命をささげるという忠誠心を当たり前のこととする国民的想像力の特殊性を問う¹⁾。そして、この想像力は「国民」と国民以外を分ける明確な境界を持ったものであることを指摘する。

最近の日本と韓国の状況を見ると、文化のグローバル化により「日流」や「韓流」といったポピュラーカルチャーの相互流入や、消費社会の浸透によるライフスタイルの同質化が起きており²⁾、それは文化外交や東アジア共同体の基盤となる共通のアイデンティティをもたらすのではない

いかという見方も出ている³⁾。同時に、それと拮抗・並存する形で竹島・独島などの領土問題や従軍慰安婦、靖国神社参拝など日韓の間の未解決な政治課題は、社会の不安定化と流動化の中で両国のナショナリズムと結びつき⁴⁾、日韓の新たな境界を生み出している。

本書は在日朝鮮人の気鋭の文学研究者が、共に「単一民族幻想」が強い日本と韓国におけるナショナリズムの力学の作動の仕方をマジョリティ（支配的な社会及び文化を持つもの）とマイノリティ（支配的な社会及び文化からこぼれ落ちているもの）との関係性を軸として批判的に検証している。

構成は、序章と終章を含めた5章で、序章「『複数のアイデンティティ』を持つということ」、第1章「日本の『内地』という政治」、第2章「韓国ナショナリズムと『故地意識』」、第3章「日韓のマイノリティから見た『切り取り』の様相」、終章「名前とアイデンティティ」である。

内容を簡単に記すと、序章では、「日本人」や「韓国人」に対する固定化されたイメージが「無意識で善意のナ

1) B. アンダーソン著、白石さや他訳『増補想像の共同体』NTT出版、1997年

2) 例えば、岩淵功一『トランスナショナル・ジャパン—アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店、2001年、Iwabuchi Koichi (2002). *Recentring Globalization: Popular Culture and Japanese Transnationalism*. Duke University Press など

3) 例えば、白石隆「東アジア地域形成と『共通文化圏』」添谷芳秀他編『現代東アジアと日本(1)』慶応大学出版会、「特集：今こそ本気で文化外交を」『中央公論』2005年10月、青木保「『クールパワー』国家日本の創造を！」『中央公論』2004年10月など

4) 例えば、高原基彰『不安定型ナショナリズムの時代』洋泉社、2006年

シヨナリズム」を生み出し、「純粹」なイメージからこぼれ落ちてしまう複数のルーツを持つ人々に対する排除となっていることを論じている。第1章では、日本の「内地」という言葉で表現される本土に対して、沖縄や北海道が置かれている特殊な位置から、非「内地」の「発見」が内地に優越感と一体性をもたらしたことが明らかにされる。第2章については後述するが、韓国では民主化運動を担ってきた世代のナシヨナリズムを「開かれたナシヨナリズム」として礼賛する風潮があるが、「民族」を実体化して語るナシヨナリズムは必ず排他主義を生み出すことを指摘する。第3章は、在韓華僑とハンセン病患者の歴史や伝記をたどりながら、消費としての安易な「感動」や「同情」をもたらす対象としてのマイノリティに投げかけられている視線を検討する。終章は、小笠原で暮らす西欧系住民の強要された改名から「普通の日本人」とは何かという問題提起を行っている。

本書は現代のネット・ナシヨナリズムや竹島・独島をめぐる抗議活動、反日や嫌韓といったナシヨナリズムの行動を両国の政治や社会変動と結び付けて分析しているのではなく、むしろ、そのような行動の背景に連続して流れているナシヨナリズムの意識をさまざまなテキストやフィールドワーク、体験などから解説している。そこに、一貫しているのは、日本にも韓国にも完全に帰属することが出来ない「在日朝鮮人」という著者の立場である。均質化を求める社会から排除・選別される立場にある著者が、その違和感を言語化した言葉がいわば「ナシヨナリズム」である。

マイノリティは周辺化されていればいるほど国家や社会からの忠誠や選択を強いられるが、忠誠を誓ったところでマジョリティからの「切り取り」(＝排除)は続き、その選択は「自由意志」に基づいたものとは言えない。これを著者は「抱きしめて切り取る」マジョリティの暴力と名づける。しかし、筆者は単にマイノリティであるということを盾にして、「被害者」の権利拡張を訴えるわけではない。マジョリティとマイノリティの関係は文脈や状況によって異なり、在日朝鮮人である著者も沖縄の人たちに対しては「内地」の位置に立っており、沖縄の中にも八重山諸島や米軍のアジアの落とし子であるアメラジアンに対する差別があるという形で「みんなが何らかの意味でマイノリティ性を抱えており」「誰もがどこかでマイノリティでありマジョリティである」という。つまり、大多数の人たちは絶対的な意味での「加害者」や「被害者」などではなく、その両方を併せ持ち、矛盾と相克を抱えている存在なのである。

オリエントに関する言説の構築が西洋による非西洋の支配を生み出したというE.サイードのオリエンタリズムの議論⁵⁾を髣髴とさせるように、「マイノリティとはマジョリティにとっての反転した自画像であり、その関係性は合わせ鏡のようである」と著者は指摘する。マジョリティがマイノリティを「切り取る」のは自分を安住な地位に保つためであり、マイノリティを排除することでマジョリティの均質性・同質性が担保されるという権力が働いている。

例えば、第1章では日本における「切り取り」の諸相として、本土との関係において沖縄や北海道が「外地」という特殊な位置づけに置かれていることが挙げられる。イメージとして表象された「外地」は、「内地」の人々が「外地」に対して優越者の地位を確保することによって「内地＝真の日本」というイメージを抱かせる。つまり、負のイメージを投影された自己の鏡としての「外地」の存在によってしか、「内地」は成立しない。これは日本人と在日朝鮮人との関係にも当てはまることである。

本書で特に注目すべき点は、著者が日本のナシヨナリズムのみならず、従来日本の知識人や在日朝鮮人研究者があまり批判をしてこなかった韓国のナシヨナリズムも、同じ立ち位置で批判をしていることである。筆者も1980年代後半に韓国でフィールドワークを行っていたが、それまで民主化運動を支援するため農村や工場に入っ

5) エドワード・W・サイード『オリエンタリズム (上、下)』平凡社ライブラリー、1993年

ていた学生や活動家がかかっていた「民衆」という言葉が「民族」という言葉へと転換された時の違和感を覚えている。その点について本書は一つの見方を提示している。

まず、著者は韓国のナショナリズムを、開発独裁を推し進めてきた保守派による反共イデオロギーを掲げた「高度成長のナショナリズム」と、民主化運動から生まれ南北の民族を主体とした「抵抗のナショナリズム」とに分ける。そして、前者は親日派や既得権益層の問題として韓国内でも批判されているが、後者は無条件に良いものとして評価されている、という。しかし、「抵抗のナショナリズム」は純粋な民族教育を受けてきた「87年民主化闘争世代」によって担われており、竹島・独島を韓国領であると主張することには何の疑問も躊躇もない。また、盧武鉉政権を支持してきたこの世代には旧満州や対馬を韓国が回復すべき領土であるという「故地意識」が強い。著者は、韓国内におけるコリアン・ディアスポラを礼賛する風潮のもとで、竹島や満州は韓国の領土であるという「抵抗のナショナリズム」が発動した場合には、中国の朝鮮族や日本の在日朝鮮人はどのような立場に置かれるか想像力を持って欲しい、と訴える。ここでも「切り取られる」のはマイノリティである在外僑胞でないだろうか、と。そして、19世紀後半に朝鮮に渡ってきた在韓華僑に対し、土地の取得、永住権、帰化申請などの点で制度的差別が継続してきたのは韓国のナショナリズムが自国を「民族国家」と定義してきたことと無関係ではないことを指摘する。

著者が論じるように、マジョリティはマイノリティのことを知らなくても生きていかれるが、マイノリティはマジョリティのことを無視しては生きていられない。本書は「善良で普通の日本人・韓国人」として自己成形を遂げてきた（と思っている）者の認識枠組みがいかにも国民国家に縛られており、そこからこぼれ落ちてしまうものに対してどこまでも無自覚である、ということを教えてくれる。

そして、日本では在日朝鮮人として「切り取られ」、韓国では「韓国人ではない者」として「切り取られた」著者が、他称としての「在日朝鮮人」や「在日僑胞」を自称へと転換する道しるべとなるのが「複数のアイデンティティ」である。それはマジョリティである自己を意識化し、それでは馴化しきれない別のアイデンティティを内包していくことである、と提案する。

筆者はこの部分は本書の核心の1つであると考えているが、複数のアイデンティティとは具体的にどのようなものなのか、どのようにすれば獲得出来るのかについて詳しく説明されているわけではない。例えば、著者のようにエスニック・マイノリティである在日朝鮮人や両親が国際結婚した場合など生まれながらにして「複数のルーツ」を持つ人の場合には、アイデンティティもおのずと複数になる。あるいは、地方出身者で方言と「標準語」との間で齟齬を感じた人も、その違和感をもとに複数のアイデンティティを形成することは出来る。では、例えば両親が日本人で東京生まれの東京育ちの男性は、いかにして複数のアイデンティティを形成することが可能となるのだろうか。

日本人であることを本質化し、あたかもそれが数多くある属性の中でも最高にして最良のものであると思わせる政治が、近代のナショナリズムの暴力である。日本人であることを唯一絶対のものとするのは、「日本人」として想定される人々の周辺部にいる人たちの存在を見えなくさせ、無意識のうちに排除することにつながる。近代の日本は、内に対しては「日本人であること」というナショナル・アイデンティティを絶対の価値として称揚し、アイヌや沖縄などのマイノリティに対して「ちゃんとした日本人」になるように圧力を加えてきた。

筆者は、著者の「複数のアイデンティティ」という提案とは、構築された「ちゃんとした日本人像」からずれている部分やみ出している部分に自覚的になり、自分は「普通の日本人」であるというナショナリズムがもたらす呪縛から解放されようということではないかと考える。「日本人」対「外国人」という二項対立ではなく、地域社会や職場における、多様なつながりを通して「ちゃんとした日本人」を解体することが出来たとき、それは

マイノリティのみならずマジョリティにとっても生きやすい社会になっているはずである。

「抱きしめて切り取る」排除の論理は、自分の地位を確保するために常に自分よりも下を生産し、差別し続けるという憎悪の連鎖システムを生む。では、その場合に被害をもっともこうむるのは誰か？大学を卒業しても就職がない、正社員であってもリストラをされるような現在の不安定で流動化した社会では、誰もが排除される可能性を持っている。排除されるのは特殊な人たちではない。あなたや私もそこに含まれている。格差社会がナショナリズムを生み出し、「日本人であること」が唯一個人と社会とを結ぶつながりとなってしまった現在、どのように排除から包摂へと社会構造を転換していかれるのだろうか。支配から共存へとマジョリティが変わらない限り、グローバル化による格差の増大は、憎悪の連鎖をもっとも弱い立場にある人たちへの暴力へと向かわせるであろう。それを回避するヒントが本書にはつまっている。